

Title	J. Trevett, Apollodoros the son of pasion
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1994
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.64, No.1 (1994. 9) ,p.111- 115
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19940900-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J. Trevett,

Apollodoros the Son of Pasion,

Oxford: Oxford University Press 1992,

Pp. XIV + 209, £27. 50.

ISBN 0 19 814790 2

真下英信

本書は、オックスフォード大学のすぐれた古典学研究所の学位論文の出版を目的とする *Oxford Classical Monographs* シリーズの一冊として上梓されたもので、奴隷ながらも富と才覚によってアテナイの市民権を獲得したパシオン（以下、P.と省略）の息子アポドロロス（以下、A.と省略）の伝記的研究と政治活動の考察を目的とする。その内容は、大きく三部から成ると言って良からう。第一部は、P.一族の履歴を述べた第一章である。こ

批判と紹介

こで、著者は確実とみられる史料から知られる限りの彼等の生涯をたどる。史料的な問題は、後注で検討、詳論されている。第二部は、第二、三、四章のA.の弁論を考察した部分からなる。誤ってデモステネスの著書として伝えられている中でA.が口演している作品の幾つかは、実はA.自身の手になることが考証される。また、弁論が執筆された知的背景や教育についても論じられている。最後の第三部は、第五、六章にあたる。ここでは、奴隷出自の市民の息子が、ポリスという封鎖的市民団の中でどのような政治活動をなし、その活動を市民がどのような目で見っていたのか等が考察される。こうした検討によって、著者は、前四世紀アテナイの社会的政治的特質の解明を試みる。因に、我が国でも良く研究されているP.の生業であった銀行業そのものについてはほとんど言及されていない。

以下、各部を少し細かに述べてみたい。まず、第一部について。P.一族については、当時としては比較的良く知られている家柄とは言え、本文の三倍近い量の後注が付されている事実が示すように、その履歴は不詳な点が多く、断片的かつ憶測の域を出ないものが多い。その詳細は本書に委ね、ここでは、評者が関

心を持った所のみを略載するに留めておく。

フェニキア人とみられる奴隷 μ は、二人のアテナイの銀行家に仕えた後に解放され、自らも銀行業を営むようになる。その経緯については四つの見解があるが、まず銀行を賃借、後にそれを買収して独立した可能性が一番高い。結婚は前三九〇年代で、妻はアテナイ人ではなかったと思われる。二人の間に長子 ν が誕生したのは前三九四年頃である。 μ の委細を伝える最古の資料である演説 (Isoc. 17) はイソクラテスの真作で、前三九四―三九三年の作である。国家への貢献の報賞として μ がアテナイ市民権を授与された年代は不明だが、コリント戦争の頃とみる初期説 (ex. J. K. Davies) よりも前三七六年頃とする後期説 (ex. R. Bogaert) がより妥当である。なお、彼が市民権を得た後に政治に携わったとの伝えはない。その後、 μ は銀行業務をパシオン (彼の奴隷、後に解放される) に任せ、最後は彼に賃貸する。 μ が七十タラント前後の資産を残したのは事実で、銀行業はそれ程有利な仕事であった。

μ の死後、息子の ν は商業区であるペイライエウスから田舎に転居した。これは、ポリスの都市と田園を考えた時、面白い事である。

ここで彼は隣人との争いに巻き込まれながらも、結婚後は富裕市民として三段權船奉仕などの公共奉仕に多額の資産を費やし、市民に好印象を与えようとした。その後、父の遺言によって義父となった人と対立、係争事件に巻き込まれる。こうした一方で、彼は政治活動に係わっていく。評議會議員になると、当時の外交的危機を打開するために觀劇手当の資金運用の改革に着手する。だが、ここでも政敵と対立。加えてこれを契機に両者には私的にも確執が生じる。

以上が、奴隷ながらもアテナイ市民となった人として知られている二人の人物の内の一人、 μ とその家族の略歴である。

常に紛争に係わっていく ν 、その理由は、彼の出自故なのか、個人的資質によるのか、それともこれは当時の市民の一般的な姿なのか、読者には興味湧く所であろう。

ところで、デモステネス全集には、偽作と言われるものがある。この内、 ν が口演している演説は、 ν 自身の作品なのか否か、十九世紀から喧しい議論がなされている。第二部は、この ν の口演している演説の特徴と作者問題を中心に考察する。その要旨は、次の三点にあ

る。

(1) Aが口演している七作品の内、六つ(46、49、50、52、53、59)はA自身の執筆になる。残る45はデモステネスの手になる。

(2) Aの作品には、それなりの技巧が認められる。彼の演説は、統一性に欠け締まりがなく、凡様であるとする従来の見解には誇張がある。

(3) Aは弁論術の特別な教育を受けなかったとする通説に対して、彼はそれなりの教育を受けたと著者は考える。しかし、作品はデモステネスらの如き専門的なものと言うよりも素人弁論的な所がある。

まず、(1)について。著者は、執筆者をめぐる学説史を簡単に回顧した後に、演説の年代、伝承、写本、内容そして言語と文体から上述の六作品をAのものとして断定する。ただ、言語と文体の研究は、古典研究の通例に違わず、解釈が大きく分かれるもので、本書でも一番問題になる所であろう。例えば、47にはAと結合するものは何もない。(P.62)と断言出来るのかどうか、弁論の知識に乏しい評者は、戸惑いを感じる。W. Wyseの極論は別にして、弁論に展開されている政治思想から作者を推論する難しさは、K. J. Doverが指摘している通

りである。なお、Aの作品がなぜデモステネス全集に入ったのか、諸説がありいずれが正しいのか決定し難い。次に(2)について。A. Schaeferに代表されるAの演説は二流であるとする評価に対して、著者は演説の構成ならびにその要素、文体を考察した上で異論を唱える。Aの作品の多くは、当時の弁論術の理論に従って四部構成をなしている。「序論」は主旨、通則に従っている。「提題」部分は簡潔明晰たるべしとの原理に反して、Aのそれは、しばしば冗慢とみなされており一般に高い評価を受けていない。しかし、この見解は厳しすぎると著者は考える。確かに、Aは論点を絞り切れなかったり、脱線して説明がぐどくなる所が認められるが、自分や相手を巧に描写したり聴衆を楽しませる努力を怠っていない。他方、「立証」部分については、Aが最も批判される所であるが、この点、一面の真実がある。Aは、デモステネスやイサイオスなど専門的弁論家に技術的には劣るが、その作品は多様性に富み、慎重に考察する必要がある。いくつかの作品は、潜在的ではあるが明晰な論証がなされている。他方、「結び」の部分には欠点や貧弱さが目立つ。

Aの文体は、デモステネスなどよりも長文が多くリ

ズムを欠きしかも不明確な文が目立ち語句の繰り返しも多く、高く評価されていない。だが、著者によれば、文体を洗練しようとする作者の努力が、語句、対句、合成語の用法や抽象名詞の多用に認められる。彼の文にはそれなりの推敲の跡が認められるが、秀でた文芸作品を作る才能に欠けていたと著者は結論している。

(3) について。彼が如何なる教育を受けたのか学説の一致はない。この点、断言できないとしながらも、当時、弁論術を学ぶ様々の機会があり史料や法律の引用方法などからして、 γ はそれなりの教育を受けたと著者は考える。

ρ と α がアテナイで政治社会的にどのような活動をし、市民からどのように見られていたのか、この点、親子間に相違があったのか否かを論じるのが第三部で、評者の最も興味を覚えた所である。

ρ は有力政治家達と交友があつた。だが、それも商業的な面のみで、 ρ が彼等を政治的に援助したこともなく、また、市民権入手後に政治に係わつたとの伝えない。

息子の γ は、政治家との交流を父から受け継ぎ社会的に上層の人々と交際していった。一時は反マケドニア

の領袖デモステネスの支持者になり、彼の方針に沿つた政策を打ち出している。そして、自ら指導的政治家になろうと野望を持って、公共奉仕などに尽力、人気を得ようとしたが、結果は失敗した。その理由として相次いで係争事件に係わり資産を蕩尽した上に、訴訟好きが市民に嫌われたこと、才能の欠如そして生れに対する極端な偏見はなかつたとは言え、やはり出自は解放奴隷の父にあることが政敵に利用されて政治的権勢を得られなかつた等々が指摘されている。

では、アテナイ市民はこの親子に如何なる態度で接したのであろうか。 ρ はかつて奴隷であつた自分の立場を弁えて行動した上に、公共奉仕などで富を市民のために消費したので人々に好意的に迎えられた。他方、 γ は日常生活、思想さらに交友関係において富裕な市民の一人として振る舞つた。この態度は、私的な面では別の問題を惹起しなかつたが、積極的に政治に携わつていくと、彼は出自故の偏見にさらされていくことになつた。帰化人を父に持つ γ は、生粋の富裕な市民として行動していくと、人は己の分限を弁えて行動すべきとの市民の冷視を浴びることになつたのである。富をもって市民の好意を得ても、 γ は自分の出自を意識せざるを得な

かった。

このように、本書は、 Δ なる人物を通して前四世紀アテナイの政治的社会的側面を立体的に描出することに成功した良書と言えよう。そして、史料的にも満を持して執筆された本書は、今後の Δ 研究の原点となろう。なお、評者がすでに本誌で紹介した(六三卷三号、一〇三—一〇九頁) Millettの書と併せて読むと特に有益である。

最後に、本書を一読した評者の感想を記しておく。

(1) 十九世紀と異なり、今世紀、弁論は、注釈書を含め余り研究されない傾向にあった。本書は、 \square M. MacDowellのアンドキデス、デモステネスの注釈書とならんで弁論研究の復活傾向に拍車を掛ける一冊となろう。

(2) 前四世紀のアテナイ史の解明に弁論が重要な史料である事実は改めて述べるまでもない。しかし、我が国のギリシア・ローマの古典の翻訳は、悲喜劇や詩などの文学、歴史書に片寄っており、弁論はなぜか皆無に近い状態が続いている。我が国の西洋古典学の研究が真に根をおろすためにも、すぐれた弁論の翻訳の出版が焦眉の急であろう。

(3) ギリシアの都市国家ポリスは、市民中心の封鎖的社會と良く言われる。前にも述べたが、奴隷がアテナイ市民になった事例は僅か二例しか知られていない。事実、これは極めて例外的なことであつたろう。しかし、考えようによつては、二世が外国で大統領になると騒ぐが、本国では帰化人が首相になれる可能性はまずない事実を人はほとんど意識しない我が国の政治状況よりも、ある面ではポリスの方が開放的な点をもっていたようにも考えられる。こうした思いは誤りであろうか。

以上、慶応義塾大学も出版局を持ち、本書の如きすぐれた学位論文のシリーズを世に問う日が来ることを期待して筆を擱く。

(1994. IV. 2)